何で秋田県は学力が高いのか

①秋田県は目的的に学力向上が図られているわけではない。
②40年前の学力テストにおいて、全国でも最下位に近い実態であった。
③そこで、教育委員会、教職員団体（組合）が一体となって学力向上の取組を始めた。
④秋田県が40年前に取り組んだ内容は、まさに、「今」全国で取り組まれている事であった。
■少人数指導の徹底
■校内での補充学習の徹底
■幼児教育の充実
　河東中の学力向上や生徒の人間性の育成においても、この3つは不可欠なもの・・
⑤そして、秋田県にはもう一つの学力向上の背景があった。
■自然環境的要因としてに、冬が長い。家の中で過ごす時間が多い。家庭内のつながりが深い。
■文化的要因として、塾が少ない。少ないから学校への期待感が高い。期待感が高いから教師への尊敬感情が高い。
⑥要するに、家族や他者とのつながりの強さが、学力向上の背景にある。
⑦つながりと学力向上の相関として、都市部の学力は低下傾向にある。都市部ほど学校、家庭、地域のつながりが弱い。つながりの格差が学力向上の格差にもつながっているのではないか。
⑧もしも、このつながりが学力を向上させる一つの要因であるのならば、授業づくりにおいてもつながりを重視すべき。
⑨しかし、授業におけるつながりは決して目的ではない。学習のねらいを達成するための手段としなければならない。
⑩生徒間の切磋琢磨の上に学習のねらいを達成した先にこそ、生徒間のつながりば芽生えてくる。
⑪ならば、「はい、それでは班にしてみんなで考えて」は果たしてどうであろうか。
⑫「俺、わからんけん、A君の考えでいいよ」、「お前がいっとけよ」、何も語らず「・・・」の生徒がどれだけいるだろうか。
⑬今一度、自分の授業の学習形態について再考してほしい。
　昨年、ある中学校の社会科の授業の指導助言に行きました。これまでの学習形態は何でも生活班でやって来たとのこと。今回始めて、「ハンバーガー屋をどこに出店すべきか」をテーマにして、自分の考えと違う考え方の生徒をあえて同じグループにして4人編成での話し合い活動を仕組みました。見事に、生徒達は活発に持論をぶつけ合いながら授業は進行していきました。授業後の教師の言葉が忘れられません。「あのような生徒の姿を始めてみました。びっくりしています。いつもなら寝ている生徒が、あんなにも堂々と意見を言えるとは思いませんでした・・・」
我々はプロの教師です。生徒の持つ潜在能力を引き出してこそプロ教師です。そのためにも授業において、学習形態の工夫をするだけでも生徒の能力は引き出されます。ぜひチャレンジしてみてください。

志をもって、社会を逞しく生き抜く生徒の育成

皆さんは糸島の姫島をご存知ですか。姫島分校は海に面した木造の小中が一緒になった学校です。本当に「二十四の瞳」の舞台のようです。道路は1本しかありません。警察もないので通る車にはナンバーなんてありません。数年前、校内研に呼ばれ時間があったので校長先生にお願いして一人、海沿いを散歩しました。エメラルドグリーンの光輝く海を眺めていたら時間が立つのも忘れてしまい、気づいた時には向こうから自転車に乗った校長先生が大きな声で「先生～、もう校内研始まっていま～す」と血相変えてやって来ました。
　海に見とれて、校内研に遅刻する指導主事など前代未聞です。
　ここで何を伝えたいのか・・。
　教師だからと言って、失敗を恐れなくていいですよ。たくさんたくさん失敗しましょうよ。精一杯の失敗は必ず次につながります。そして、多くの失敗に慣れた時、失敗することが怖くなくなります。すると何でもチャレンジする教師になれますよ。ただし、不祥事による失敗だけはやめましょう。人生が終わります・・・